

信毎俳壇

神野 紗希 選

てんてくのあじのふれんちとーすとたはるだ
(中野市) 風間 一乃
夜桜や祈りの数に神足らず
(佐久市) 真山 邦弘
夏霧のボヴェリア島を啼く鴉
(小諸市) 加藤 陽介
寛解のおぼつかなさや花曇
(上田市) 竹内 重美
芍薬の二花一花に熊ん蜂
(上田市) 竹内 創造
さもなさは子猫の写真せんふ消す
(大阪府松原市) ならりずむ
臘月夜に名画座の券売機
(松本市) 伊藤 和夫
立ち見のキネマ新編のネッカチーフ
(諏訪市) 間部あさあ
さくらの夜母につながる糸電話
(原村) 加藤津恵子
花月夜ICUに姉一人
(佐久市) 吉岡 道明

一句目、フレンチトーストの甘さを天国の味だと表した一乃さんの4歳の豊かな感性。まぶしい春の陽もあふれる。二句目、祈りがかなわないのはその数に対し神様が足りないからだ、と考えた。神の代

わりに夜桜の荘厳を仰ぐ。三句目、ボヴェリアはイタリアの無人島で、ペスト患者の隔離などに使われ幽霊の噂が絶えない。夏霧に響く鴉の声が不穏だ。四句目、おぼつかなくも寛解の安堵。ご自愛を！

選評

坊城 俊樹 選

ハチは見た渋谷の街に春の川
(坂城町) 宮下 和夫
ふらふらに昔の吾れが揺れてゐた
(飯山市) 小野沢竹次
亀鳴くやパラボラ二基は銀河向き
(佐久市) 赤岡 厚子
春時雨合羽着せたる大連れて
(飯田市) 大石 昭重
春泥の樽重しや最終区
(佐久市) 木内利一郎
いつまでも枝垂柳と遊ぶ風
(松本市) 小川 夏英
象の骨眠る湖畔や聲の角
(長野市) 白鳥 寛山
風を行く翼のやうな春シヨール
(佐久市) 飯島八代恵
母の曰や蛇の句帳を読んでみる
(白馬村) 確井 つね
説法の書かるる寺内猫の恋
(長野市) 坂口 智弘

一句目、「ハチ」とは名犬「ハチ公」のこと。ご主人の帰りを毎日待っていたあの頃の渋谷を彷彿とさせる。「春の小川」も確かに存在した。回想の名作。二句目、現在もあるこのブランコを見て小

さかった頃の自分の姿を投影した。何か寂しいことがあったのか。郷愁の名作。三句目、この幻想的な季題は銀河までも到達する。パラボラアンテナが捉えた亀の鳴く声の不思議な宇宙感覚。

選評

今井 聖 選

春の市ひとほり見て味噌を賣ふ
(松本市) 田中しほす
速球を投げたるごとく夏に入る
(松本市) 小松 久志
田起しの畦に脈打つ息吹かな
(松本市) 伊藤 和夫
奥能登や植田の下は荒き波
(上田市) 竹内 創造
陽炎の中へ幼な子割け入りぬ
(佐久穂町) 石田 弘子
苗莞のただでくれたる段ボール
(安曇野市) 平 至行
組板は木曽檜なり初鯉
(箕輪町) 向山 政俊
耐へてきし我が足裏に春兆す
(小諸市) 佐藤ゆきな
春雨に山消されたる出で湯かな
(飯綱町) 坂井 寿男
雲退きて輝きにけり春の山
(飯田市) 大石 昭重

一句目、何を買おうかと市を見て回って結局味噌を買った。食の基盤に味噌があると改めて実感する。二句目、年が明けてからあまりにも早く夏が来た。もう5月だ。これも実感。三句目、田起こし

に息吹も脈も感じる。さあ、青葉の季節。四句目、植田に接近している海は能登の地形。この二者を空間の中で上下に配した視点が新鮮。五句目、陽炎の中に自ら入ってゆく幼子のイメージ。

選評